

Title	語彙論研究
Author(s)	宮島, 達夫
Citation	大阪大学, 1996, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40269
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について <a>〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	宮 島 達 夫 <small>みや じま たつ お</small>
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 1 2 7 5 8 号
学位授与年月日	平成 8 年 12 月 6 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	語彙論研究
論文審査委員	(主査) 助教授 仁田 義雄 (副査) 教授 真田 信治 教授 前田 富祺

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、現代日本語の語彙体系を明らかにすることを通じて、語彙論自体の体系化を計ったものである。「第 1 部 語彙の体系」「第 2 部 単語とその意味」「第 3 部 単語の文体的性質と意味」「第 4 部 単語の文法的性質と意味」の 4 部からなる。

第 1 部 語彙の体系

「第 1 章 語彙の体系」は、現代日本語の語彙体系について述べたものである。意味・語種・形式・文体などの諸側面での体系に分け、特に意味の体系について詳しく論じた。意味的な体系性が崩れる場合としては、体系性のアンバランスを示す「とけあい」と具体的な文脈の中で対立が消える「中和」とがある。和語・漢語・外来語それぞれの語構成に、どのような特徴があるかについても考察している。

「第 2 章 日本語とヨーロッパ語の移動動詞」は、類型論的位置づけの試みである。日本語は、「あがる、はいる」のように、もっぱら移動の方向によって特徴づけられる動詞が多い。ヨーロッパ語の中では、フランス語がこれに近いが、ロシア語は、まったく逆に、方向性を軽視し、歩いていくか、車でいくか、飛んでいくか、などという移動の方法を重要視し、英語・ドイツ語などは両者の中間にあることを指摘している。

「第 3 章 専門語研究の視点」は、専門語とは何か、という規定から出発し、専門語の研究を抜きにしては現代語の特徴が捉えられないこと、各分野の専門家との協力の中で言語研究者が果たすべき役割があることを述べている。

第 2 部 単語とその意味

「第 1 章 単語の本質と現象」では、単語の現象的な規定を精密にすることが、すなわち単語を規定することだ、とするのは錯覚だと指摘している。単語は、二重分節的表現手段としての言語に特有なもので、本質規定を欠くことはできない。一方、その現象形態は言語によって多様で、単語と非単語の間には無限の中間段階がある。そこに明確な線を引くことは、科学的であるよりも、むしろ実用的・技術的な仕事であるにすぎないと述べる。

「第2章 単位語の認定」は、前章の議論をうけて、具体的に統計的な語彙調査において設定すべき単位のありかたを論じたものである。

「第3章 無意味形態素」では、ビー玉の「ビー」や、あわてふためくの「ふためく」など、現代語の中で、どのような意味をもっているか不明なものを、「無意味形態素」と名づけ、無意味形態素は、一般的には、本来透明であった語源が不透明なものになることによって成立すると述べている。これを和語・漢語などの語種や接辞・語根などの構成要素、あるいは各品詞といった諸方面から考察したものである。

「第4章 1拍語形の不安定性」では、動詞の中止形の、シ形とシテ形という二つの形のうち、1拍の場合にはシ形があまり用いられず、シテ形が優勢であることを、実際のデータから計量的な調査によって証明した。日本語では「こ→こども、の→のはら」のように1拍の語形が引き伸ばされて長くなることがあるが、これもその1例であると述べる。

「第5章 意味の体系的性」は、単語の意味が複雑な体系をなすことを説明している。特に重要なのは、音韻や文法と違って単語の意味に上位・下位の関係がある点であるとする。

「第6章 言語のあいまいさ」は、言語は、本質的にあいまいなものだ、という立場から、言語的なあいまいさと伝達論的なあいまいさとの区別、国語辞典の意味規定に見られるあいまいさ、あいまいさの客観的な根拠などに触れている。言語学の中に存在する、あいまいさを否定しようとする流れに対して、それは、言語の存在を非歴史的なもの、個人的なもの、意識内のものへと解消する道であると批判している。

第3部 単語の文体的性質と意味

「第1章 単語の文体的特徴」は、単語の文体的性質と意味の問題についての総説である。語彙の総体は、文章語・俗語などの文体的特徴からみて、どのように分類すべきものであるのか、文体的な性質は、年代や地域や専門分野の差などと、どう違うのか、また、意味や語形など単語の他の性質とは、どのような関係にあるのか、などについて論じている。

「第2章 動詞の意味と文体的性質」では、文章語的な動詞の意味が大規模な現象、公的な現象、抽象的な現象などにかたよることを実例に即して述べ、俗語的なものは、あらい動作のニュアンスを帯びることを指摘した。

「第3章 名詞・形容詞の文体と意味」も、同様の事実を取り上げる。文章語の「草原」は日常語である「くさはら」に比べて、より大規模なものを表し、文章語の「久しい」は日常語である「ながい」よりも、時間的な量が大きい。また、このような現象が起こる根拠についての理論的な考察を試みている。

「第4章 日中同形語の文体差」は、日本語と中国語で、表記が同じで意味的にも近い〈日中同形語〉にも文体的特徴は一致しないものがあることを指摘した。日本語の「学習」は「勉強」よりも改まったことばだが、中国語の「学習」はまったくの日常語であることを指摘している。

「第5章 単語の文体と意味——英語・ドイツ語・中国語」は、単語の文体的価値と語彙の意味とに一定の相関関係があることが、日本語にかぎらず、一般言語学的に言えることを示すため、外国語の実例を挙げたものである。

第4部 単語の文法的性質と意味

「第1章 動詞の意味と文法的性質」は、まず意味と文法との関係を概観し、語彙の意味の形式的側面を指す〈カテゴリーの意味〉という概念を提唱した。また、意味が状態を示すように変化するとともに、用法が限定された「ばかげた」など一連の単語があることを指摘し、さらに、動詞の意味が、ボイスなどの形態論的性質、「一に～する」と「一と～する」などの構文論的性質にどう影響するかを論じた。

「第2章 「ドアをあけたがあかなかつた」」は、動詞の意味内容に結果性がどの程度含まれるかを調べたものである。「太郎は二郎を殺したが二郎は死ななかつた」という文は不自然だが、「すいかを冷やしたがよく冷えなかつた」という文はなりたつ。つまり、「ころす」は動作の結果まで含んでおり、「ひやす」は、そこまでは意味していない、ことを明らかにした。

「第3章 動詞の意味範囲の日中比較」は、第2章を受けたものである。日本語の動詞は動作の結果まで含むことが多く、「馬を三年買ったが買えなかった」とは言えない。「買った」という以上、行為は実現したのである。したがって、「三年買おうと努力したが買えなかった」のように言わなければならない。これにあたる中国語は「三年買ったが買えなかった」に相当するものであり、日本語と中国語で動詞の結果性の範囲には相違があることを示した。

「第4章 格支配の量的側面」は、動詞の格支配を統計的に実際の用例について調べたものである。移動動詞の中でも、出発の「一から」にかたよるか、到着の「一に」にかたよるかは、動詞によって決まっている。「東京へ汽車で行く」のように、ある動詞が2つの格を支配する場合、その2つの格のあいだには、共存しやすいものと反発しやすいもの、および無関係なものがある。この関係についても調査し、さらに、このような統計的調査が、文法研究にとってどのような意味をもつか、についても論じた。

「第5章 移動動詞と格・前置詞——ヨーロッパ語との比較」は、前章と同じことを英語・ドイツ語・フランス語について調べたものである。日本語の格助詞による表現に対応するものは、ヨーロッパ語では、格語尾と前置詞であり、それらと動詞との結びつきのかたよりを統計的に示している。

「第6章 形容詞の語形と用法」は、語による用法のかたよりを示したものである。形容詞によっては、終止法・連体法・連用法のどれかにかたよっていることがある。「くろい・あかい・しろい」など色をあらわす形容詞は、連体法に集中し、一方、「かたい・はやい・つよい」など、動作に関係したものは、連用法がよく使われることを示した。

「第7章 情態副詞と陳述」は、陳述副詞とつながる側面について、情態副詞の用法を考察したものである。命令形と共存しないのは、一般に陳述副詞の特徴である。しかし、情態副詞の中にも、このような呼応関係を示すものがある。たとえば、「おもわず」とか「けろりと」、あるいは「しみじみ」「無邪気に」などは、命令の形とは共存しない。「偶然」とか「ひとりでに」などという、意志を越えた現象と関わる副詞もそうであることを述べた。

「第8章 カカリの位置」は、語順の傾向を調べたものである。日本語の語順は、述語が文の最後にくる以外は、一般に自由だとされる。しかし、主語・目的語・修飾語などの位置は、その文法的な役割によって、ある程度まで習慣的に決まっている。だいたい、「時>所>主体>ようす、対象>結果」という順序である、ことを明らかにした。

「第9章 文法体系について」は、方言記述のために文法体系はどのように考えるべきかを、出身地である茨城県の方言を材料にして書いたものである。文法体系を部分的にではなく全面的にとらえるべきこと、形式主義をすてて意味の記述をも含めるべきこと、動詞・形容詞の語彙的な意味との関連をとらえるべきこと、などを論じている。

論文審査の結果の要旨

本論は、『単語教育』(1957刊行)以来、語彙研究・意味研究の世界で、常に指導的役割を果たしてきた論者の、語彙論・意味論研究を中心にしたほぼ40年にわたる研究の集大成であり、590頁におよぶ大著である。本論は、語彙ならびに意味の体系について、日本における日本語を対象にした先駆的で本格的な理論的かつ記述的研究である。論者には、本論に取められた現代日本語を中心にした研究以外に、古代語・近代語や方言の語彙についての研究がある。その成果の一つが『古典対照語い表』(1971刊行)である。本論の諸論考も、そのような幅の広い研究を踏まえたものである。

近代言語学が獲得した成果の一つに、言語は体系的であるという認識がある。この認識は、まず音韻論の分野でその内実を得ることになる。それに対して、語彙や意味に対する体系性の追求は遅れることになる。本論は、そういった遅れていた分野を、内実豊かな記述と鋭い着想をもって、着実かつ大きく前進させたものである。論者は、このように捉えにくい語彙の体系を、全体・統一体の側面に重点を置く大きな(マクロな)体系と、「はりあい」の面に重点を置く小さな(ミクロな)体系とに分けて捉え、さらに、この両者をつなぐものとして、単語群をまとめかつ分かつところの語彙のカテゴリーを取り出し、研究を展開している。また、複雑な体系を捉えるために、体系性の高さ・段階性といった考え方を導入した考察を提唱している。賢明で有効的な捉え方・研究の進め方であろう。

本論の優れた点の一つとして、取り扱い対象の豊富さ・包括性がまず挙げられる。単語は言語の最も基本的な単位

である、という考えに立ちながら、語彙や意味の体系性についての考察をはじめとして、単語の認定、合成語における要素の独立性の問題、意味を明確に持っていない無意味形態素の極めてきめの細かい取り出し、さらに、単語の本質についての考察などを行い、そして、単語の表している意味と単語の有している文体的性質・文法的性質との相互関係について、多様な側面から考察を施している。本論では、語彙論の構成要素をなす単語について、考察すべき重要な側面のほぼ総てが取り扱われている。また、本論の取り扱い対象の豊富さを示すものとして、豊かにかつ的確に材料を集めて行われた対照研究・類型的研究の優れた実践例がある。例えば、移動動詞を例に取りながら、意味のあり方および共起する格・前置詞について、日本語・英語・ドイツ語・フランス語・ロシア語を比較・対照した研究や、動詞の表す結果性について、日本語・英語・中国語を比較・対照した研究を行っている。さらに、単語の意味と文体の相関関係についても、英語・ドイツ語・中国語を対象にして考察を行っている。外国語との対照研究を行うことで、日本語だけを見ていたのでは見えないことが分かってくるであろう。このような本格的な対照研究は、今まで日本語研究者のよくなしえなかった研究である。

また、約45万の用例を調査することによって成った論者の『動詞の意味・用法の記述的研究』(1972刊行)を踏まえて書かれた動詞の語彙の意味と動詞の文法的性質の相互関係についての本論の議論・考察は、まさに圧巻である。カテゴリーの意味の抽出は、極めて注目に値する。このことによって、単語の語彙の意味と文法的性質の相関関係が、具体的に内実豊かに捉えられるようになった。

次に、本論の方法論上の注目すべき点として、豊富な実例や大規模な調査を踏まえたうえで論を形成・展開している、といったことが指摘できる。本論に含まれる諸論考には、国立国語研究所での大規模な語彙調査を踏まえての論考が少なくない。そのことが、これら諸論考をスケールの大きい確かなものにしてしている。無意味形態素の例として、語根的なもの、接辞(接頭・接尾・接中)的なものや、また品詞の観点から、名詞、形容動詞、動詞、連体詞の一部として現れるもの、副詞的な使用にあるもの、さらにレベルからして単語であるものなど、実に様々なものを取り出されているが、こういったことも、大規模な調査に支えられてはじめて可能になったものである。また、統計的・計量的手法を用いての分析・記述が挙げられる。例えば、どの言語にどの文体レベルの語がどれくらいあるのかといったことや、意味分野の観点から、語種と意味との関係などについて、統計・計量的手法を用いながら、エレガントに分析・記述を進めている。語種については、表記からの論はよく見られるが、語種と意味との関係について述べたものは今まであまりない。新しい試みであろう。

また、随所にきめの細かくかつ厚みのある分析・記述が観察される。例えば、同じ状態動詞でありながら、「現存する」は〈現在〉のみ、それに対して、「実在する」は、「過去に実在した」「現在実在する」「将来実在するだろう」というふうに、どのテンスでも使われる、といった指摘や、動詞の格支配についての共起の程度性・量的なあり方に対する調査は、その一つである。

さらに、感心させられる点に、目配り・視点・問題意識の広さがある。専門語を位相論の対象に固定化する傾向にある従来の扱いを批判し、専門語の増加を、近代における新しい知識・情報をその言語が担いうるか否かといった言語の近代化に関わる問題、さらに、専門語の発達を分業の発達の結果として捉えている。正しい扱い方であろう。

さらに、理論的であるとともに、現実的・技術的な問題をも無視しない、無理な抽象化・理論化は行わない、といった論者の言語研究に対する基本姿勢には、大いに共感を覚える。研究に対する柔軟かつ実際的な論者の姿勢の現れであり、このような態度が、語彙のような大規模な現象を取り扱うにあたって、妥当性・現実性の高い優れた論の展開を可能にしている。「本質を無視して現象だけをおう言語学が無内容であるのと逆に、実用上のこまかい問題を無視する言語学は無力である」「理論的にすっきりしても、このような実際のようなすを、説明できなければ、なんにもならない。まず、この現象を忠実に記述すべきである」といった、基本姿勢のもと、単語をめぐる諸現象が、本論において内実豊かに分析・記述されている。

また、ドイツ語やロシア語など海外の研究文献が、本論には多く引かれている。これは、日本語を専門にする研究者には珍しいことであり、論者の知見の広さを示しているものである。

長年にわたる研究の成果であることもあって、論述に重なりがないわけではない。しかし、このような点は、本論

全体の価値を損なうものではない。本論文が、単語の持つ諸側面を内実豊かに分析・記述し、日本語の語彙体系を明らかにすることを通して、語彙論および文法論の研究の前進に果たした役割は、極めて大きい。本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位に十分ふさわしい価値を有するものと認定する。